

# 第3章

## 大学教育改革の模索

1970年 全景

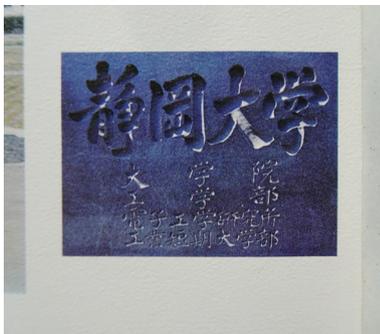
1970機械工卒アル



# 第1節 1970年代

工学部は1949(昭和24)年に第一回の入学式を挙行了。このときの工学部の学科構成は、機械工学科、電気工学科、工業化学科の3学科で、入学者は93人であった。10年ほどの着実な基礎固めを経て、1960年までには学科が増設され、入学定員が拡充された。学生定員とともに記すと、機械工学科(60)、精密工学科(40)、電気工学科(60)、電子工学科(40)、工業化学科(55)、化学工学科(40)の6学科で、入学定員は295人である。大学の理工系学科の拡充の動きは続き、1962年には合成化学科(定員40)が新設されている。続いて1964年には電気工学科が、1967年には機械工学科がそれぞれ2学科編成となり、1970年には機械工学科、機械工学第二学科、精密工学科、電気工学科、電気工学第二学科、電子工学科、工業化学科、化学工学科、合成化学科の合わせて9学科、定員415人となった。

## 1 | 1970年代の教育



工学部門標 1970年代 1970機械工卒アル

1970年代に入ると、静岡の教養部(前期課程)で一般教育科目、語学科目、基礎教育科目や一部の専門科目等を2年間学んだ学生が浜松の後期課程に進学し、2年間で主に専門科目を学ぶカリキュラムが始まり、それが定着した。

工学部では発足以来学科の増設や定員増が図られ、1971(昭和46)年の情報工学科の設置をもって10学科(機械工学、機械工学第二、精密、電気工学、電気工学第二、電子工学、工業化学、合成化学、化学工学、情報工学)及び5共通講座(応用数学、応用数学第二、応用物理、応用同第二、分析化学)の体制となり、入学定員は455人となった。

前身の浜松高等工業学校の設置以来50周年を迎えた1972年には附属図書館浜松分館と管理棟が改築され、1973年にはそれまで木造兵舎跡建物にあった共通講座が新築となった情報工学棟に移転した。また、1974年には教育用中型計算



電気・電子館 1970年頃



1970機械工卒アル

電子工学研究所 1970年頃

1970機械工卒アル

機(FACOM230-45S)が設置され、キャンパス全体の教育・研究活動の向上に特に大きく貢献した。

このように、工学部の教育・研究は発足以降、着実に進められ、その評価も少しずつ高まっていき、大学院を設置する機運が醸成された。そして1960(昭和35)年、東北大学工学部から招聘された渡辺寧が静岡大学学長となると、その指示の下、工学部長であった櫻場周吉を中心に大学院設置の準備が進められた。斎藤寿夫静岡県知事を会長とする「静岡大学工学部大学院設置期成会」が結成され、設置準備は着実に進んだ。1963年12月、文部省議決定で工学研究科の予算案が承認され、翌1964年には正式に大学院設置の公示がなされた。そして1964年4月には第一回の入学試験が行われ、26人が入学した。

この後、工学部の学科改変に対応した専攻の設置が行われ、それに伴い入学定員も順次増加し、1970(昭和45)年には入学定員78人、入学者106人となり、初めて100人を超える入学者を迎えることとなった。その後も入学者は100人を上回る状況が続き、1974年には定員を97人に拡充している。また研究科の学位規程が改正され、3人以上の教授で審査を行い、そこに助教授や講師も加わることができるようになった。

その後、修士課程の定着と共にその上に博士課程を設置しようとの機運が高まり、紆余曲折を経て1976(昭和51)年、新制大学としては初めて博士課程となる電子科学研究科[後期課程3年のみ]の設置に繋がった(設置の経緯及びその後の進展については第2節を参照されたい)。

## 2 | 1970年代の学科・講座

ここで、1970年代の工学部の学科・講座の概要を研究内容とともにまとめておくことにしたい。

### ▶ 機械工学科、機械工学第二学科(略称 M、M II) ◀

機械工学科には6つの講座があった。

第一講座は「材料力学講座」で、高速度カメラや型鍛造に関する研究を行っていた。第二講座は「機械工作講座」で、アルミニウムなど非鉄金属の切削機構などの研究を進めていた。第三講座は「熱力学」で、熱および物質移動に関する研究を行っていた。第四講座は「流体工学」で、油圧機器の研究を行っていた。第五講座は「金属材料工学講座」で、金属材料の組織と疲労強度との関連性についての研究がなされていた。のちに工学部長となる石井仁が1970年に講師として着任し、金属材料の強度に関する研究を展開している。第六講座は「繊維工学講座」で、繊維工業の省力化、高速化のための基礎研究などが行われた。

機械工学第二学科には4つの講座があった。第一講座は「塑性工学講座」で、鍛造加工における材料流動の研究などを行っていた。第二講座は「制御工学講座」で、油圧系に関する不安定現象の解明などを行っていた。第三講座は「熱および物質移動講座」で、内燃機関の噴霧燃焼の基礎的研究を進めていた。ここではの

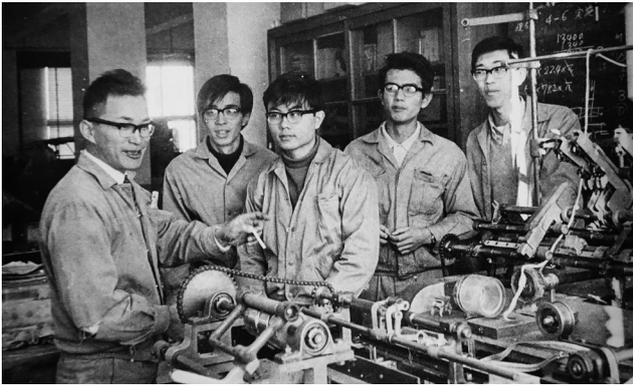


工学部案内1970



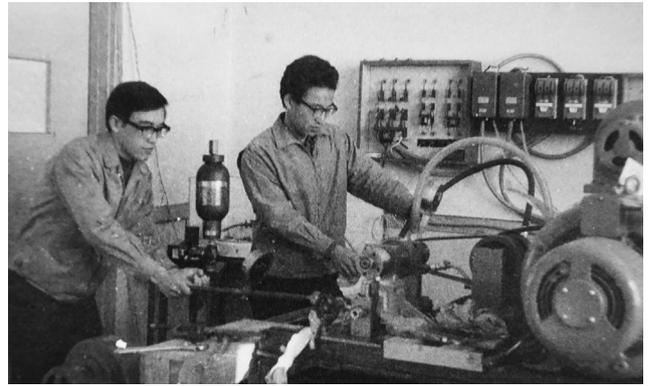
工学部案内1974

ちに工学部長となる荒木信幸が講師として学生指導をしていた。第四講座は「工学的解析講座」で、熱応力を中心とした理論的、実験的研究を行っている。のちに工学部長となる野田直剛が助手として1970年に着任している。



「そもそも この機械は、……」「？」

1970機械工卒アル 実験中



1970機械工卒アル

### ▶ 精密工学科（略称 F） ◀

精密工学科は4つの講座から構成されていた。第一講座は「精密測定講座」で、自動化偏光分光計によるさまざまな研究を行っていた。第二講座は「計測制御講座」で、可動管流量計の研究が中心であった。第三講座は「機械力学および機械設計学講座」で、リンク機構についての静力学的、動力学的挙動などの研究を行っていた。ここではピアノ弦の振動についての研究なども始まっている。第四講座は「精密加工および機械要素講座」で、精密計測用変換器の研究などを行っていた。

### ▶ 電気工学科、電気工学第二学科（略称 E および G） ◀

電気工学科と電気工学第二学科は共通する8つの講座が設置されていた。

第一講座は「電気基礎講座」で、放電現象などの研究が行われた。のちに情報学部長に就任する阿部圭一が講師として在籍し、情報処理分野での研究を進めていた。第二講座は「電気機械器具講座」で、非線形諸問題の動特性の改善などの研究を行っていた。第三講座は「電力および電気応用講座」で、放電、プラズ



実験中



1970機械工卒アル

マに関連する研究を実施していた。第四講座は「電気通信講座」で、電磁波の回折、放射の研究などが行われた。第五講座は「電気計測講座」で、高周波計測回路の研究を進めており、開発に至った各種測定器は産業界で用いられていた。第六講座は「電気制御講座」で、自動制御、システム制御に関する研究が行われた。第七講座は「電波工学講座」で、超音波の応用に関する研究が中心であった。第八講座は「電気物理講座」で、半導体材料と素子の研究などが行われた。

## ▶ 電子工学科 (略称 D) ◀

電子工学科には当初4講座が設置されていたが、1969(昭和44)年に2講座が追加され、6講座となった。第一講座は「電子回路講座」で、光および電磁気現象の理論的解析などの研究を行っていた。第二講座は「電子物理講座」で、アナログとデジタル技術による楽音の合成などを進めた。第三講座は「電子管講座」で、マイクロ波、ミリ波に関する電子装置の研究が中心であった。第四講座の「電子応用講座」は実質的には1975年の発足であり、半導体の磁気抵抗現象などを研究していた。第五講座は「電子数学講座」で、音声信号処理方式の研究や、高度難聴者に対する補助装置の研究など、音声の発声機構や言語音の特徴に関する研究が進められた。第六講座は1970年に発足した「電子装置講座」で、デジタル半導体デバイスの開発を行った。



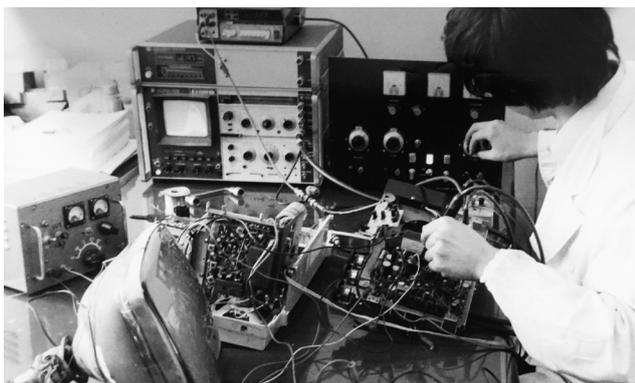
工作技術センター 1980年代

1984入学アル



工作技術センター(内部) 1978

1979工学部案内



実験中

1979工学部案内



流体講座ゼミナール風景

1970機械工卒アル

## ▶ 情報工学科 (略称 J) ◀

情報工学科は1971(昭和46)年に発足し、4つの講座から構成されていた。第一講座は「情報基礎理論」で、情報科学の基礎となる諸分野の教育・研究を担当



大型計算機室



1979工学部案内

していた。第二講座は「情報基礎技術」で、画像処理、人工知能などの研究を行っていた。のちに情報学部で教鞭をとる鈴木淳之が助教授として籍を置いている。第三講座は「計算機システム」で、計算機に関するソフトウェア、ハードウェアの研究を行っていた。第四講座は「情報システム」で、音声情報処理に関する研究を中心としており、のちに情報学部長に就任する阿部圭一が電気工学科から移ってきており、助教授として在籍している。

### ▶ 工業化学科（略称 C） ◀

工業化学科は6講座から構成されていた。第一講座の「理論無機化学講座」は溶液内に存在する金属錯体を主な研究テーマとしていた。工学部長、学長を務めた櫻場周吉がこの講座の教授を務めている。第二講座の「有機工業化学講座」は重合反応の基礎研究を行っていた。第三講座の「有機反応化学講座」は光酸化反応などを研究した。第四講座の「無機工業化学講座」は電子材料の製造、含水酸化物の研究が中心であった。第五講座は「高分子工業化学講座」で、高分子に関する幅広い研究を行った。のちに、公益財団法人浜松科学技術研究振興会の理事長を務める稲垣訓宏が講師として在籍している。第六講座は「工業化学分析講座」で共通講座の役割も担っていた。科学実験の基礎である「分析化学実験」を担当するなどし、環境汚染に関する研究なども行っていた。



化学系本館 1970年代

1979工学部案内

### ▶ 合成化学科（略称 S） ◀

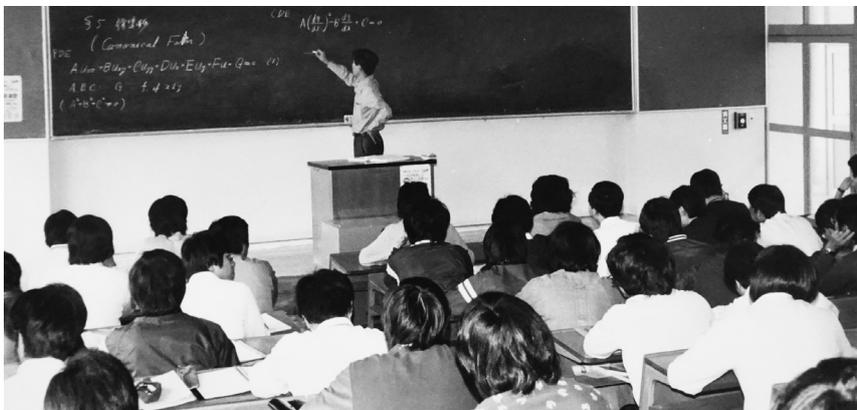
合成化学科の設置は1962(昭和37)年であり、合成化学をテーマとする学科の設置は他の大学と比較しても早い。第一講座「工業物化学講座」は固体触媒に関する基礎研究などを行った。第二講座「有機合成化学講座」は、イソプレノイド化学について、天然、合成の両面から研究が実施された。第三講座「有機製造化学講座」は当初「高分子化学講座」として発足し、のちに名称を変更した。第四講座「無機合成化学講座」では、金属の水酸化物の生成と熱分解に関する研究が行われた。なお、のちに静岡大学の理事・副学長を務めた中村高遠は1978(昭和53)年に助手として着任している。

## ▶ 化学工学科（略称 K） ◀

1959(昭和34)年に設置された化学工学科は4つの講座から構成されていた。第一講座「拡散単位操作講座」では固体と気体が関与する複合現象の解析などを行っていた。第二講座「機械的単位操作講座」では、化学工場で使われている装置による物質操作についての教育、研究がなされていた。また、流体と粉粒体の相関的な現象についても研究を行っている。第三講座「反応工学講座」では、触媒劣化機構の研究を行っていた。第四講座「化学工場計画講座」では、炭化水素類の抽出分離に関わる研究が進められた。

## ▶ 共通講座 ◀

共通講座は工学部の各学科の課程の習得に必要な共通科目を担当しており、学生定員はもたないものの、工学の基礎となる、数学、物理、化学についての専門教育を行っていた。数学教室（「応用数学講座」）では、基礎理論の研究、波動方程式に関する境界値問題に関する研究などが行われていたが、1970年代後半になると、制御理論、生体システムへのシステム理論の適用に関する研究などが行われている。物理教室（「応用物理学講座」）では、気体放電に関する研究、プラズマ物理に関する理論的研究などが行われた。また化学教室（「応用化学講座」「工業分析化学講座」）は官制上は共通講座の所属であるが、実質的に運営にあたっているのは機械工学科、工業化学科の講座であった。



講義風景

1979工学部案内



西部合同祭 1970 田中豊氏(47S)提供

## 3 | 1970年代の学生生活

(本節は、江間義則氏の学生生活の思い出からの叙述である)

### ▶ 教養部時代 ◀

私が静岡大学に入学したのは1971(昭和46)年4月だった。入学した当時は全国的にまだ「大学紛争」が続いていて、静大の教養部でも学生自治会によるストライキが度々あり授業が休講になったりした。昼休みともなると教養B棟東の広場ではヘルメットを被った活動家たちが拡声器で演説をしたり、歩道でビラを



静岡大学学生新聞(1965.9.8)



大学紛争時のビラ 大学文書資料室蔵

配ったりジグザクのデモ行進をしたりしていた。当時、沖縄の日本への返還や成田空港建設の土地収用などが大きな問題で、生協前的大通りなどには彼らのスローガンの大きな看板が立てられていた。サークルの新入生勧誘の看板も多く、昼時の生協第一食堂前は人があふれ大混雑していた。ストライキの前には体育館の2階で多数の学生を集め朝まで学生自治会主催の集会「学生大会」が行われたりした。「皆が自由に思い思いの主張をし、高校までと違う、これが大学なんだな」と少し感激したことを覚えている。

工学部の学生は最初の2年を静岡の教養部で学び、そこで所定の単位を取れば浜松に移り本格的な専門の勉強をすることになっていた。不幸にして再受講となった学生は静岡で留年するか、浜松から静岡の再受講の講義を受けに通わねばならなかった。

### ▶ 浜松キャンパスへ

浜松に移って間もなくの5月には4人1組でタスキを渡していく「伝統の駅伝大会」があった。原則全員参加ということではほとんどの学生が走るようになった。浜松市営グランドから出発し、通称「満州街道?」で都田まで行き折り返すコースで、私は都田に降りる坂を走った。駅伝大会が終わって工学部に戻ってから、驚いたことに午後からクラス対抗の「運動会」があった。夕方には皆がもう動けないほど疲れ果てていた。

浜松の工学部に移った3年生の授業は専門科目がびっしり詰まっていた。私の学科では、月曜と木曜の午後は夕方まで「学生実験」があり、毎回異なるテーマで行い、そのレポートを1週間以内に提出することになっていた。実際にいろいろ実験しデータを取り、整理して考えることは楽しかったが、いつもレポート作成に追われている状況だった。手計算や「(専門用の)計算尺」や「関数表(の本)」などを使ってデータを整理しグラフを描いたりしてとても時間のかかる作業だった。電卓が生協で買えるようになったので、電卓を買った。メモリーが1つで関数は平方根√だけの今では100円ショップで買える程度の性能だが、当時は辞書ぐらいの大きさで3万円余りした。これをアルバイトで貯めたお金で買った。データ整理の能率が上がった。

### ▶ アルバイト・サークル

アルバイトは大学の学生係で斡旋していた。授業に影響しない春休みや土日に、いろいろなアルバイトをした。網戸を作る工場、ボーリング場の建設現場、交通量調査などの仕事もした。特に面白かったのは、歌謡コンサートの会場整理や劇団の裏方手伝いだった。デパートの電気製品売場の販売員や配送手伝いは大学院時代まで長く続けた。「家庭教師」も楽しかった。2人の中学生を無事、希望の高校に合格させた。こうしたアルバイトで社会のいろいろな面を見ることができた。

サークル活動のことも思い出深い。自転車であちこち散策するのが好きだったので2年生になってからサイクリング部に入った。創部して数年で部員も多く

なく和気あいあいとした雰囲気が良かった。浜松に移ってからは、サイクリング部は近くの女子短大の茶道部と交流があり、一緒に「浜松まつり」を見に行ったり合コンをしたりした。当時、工学部の多くのサークルが女子短大のサークルと交流があった。初夏には静岡キャンパスと浜松キャンパス双方からサイクリングで御前崎の民宿で合流し合宿するのが恒例だった。



体育館で

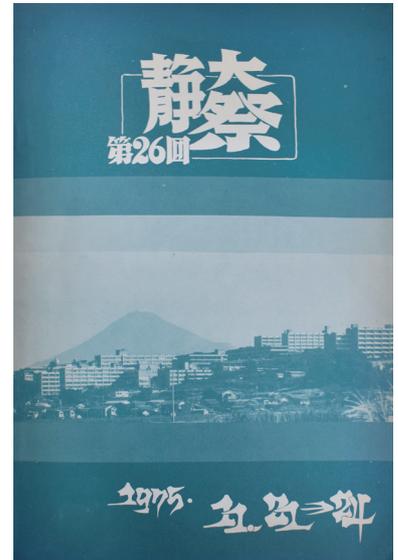
1979工学部案内

### ▶ 静大祭・夜間歩行 ◀

11月は静大祭の時期で、サークルの発表会(演奏会)が市内のホールなどで行われ、友人にチケットをあれこれ買わされて見に行った。工学部では3年生の11月初め、大学祭関連行事として浜名湖一周約60kmの「夜間歩行」が行われ、友人と共に参加した。市内の他大学からも多くの学生が参加していた。夕方6時に工学部を出発し姫街道を進み、途中「西気賀小学校」と鷲津の「本興寺」が休憩場所であった。11月で夜は寒く、夜半に本興寺に着いたときには足が棒のように疲れていた。それでも友人と励ましあってそこを出発した。浜名湖の「今切れ口」の橋あたりで夜が白み始めた。夜明けの寒風にさらされ入野町あたりでついに歩けなくなってしまった。救護車に乗り、ゴールの西寮グラウンドについた時には、すっかり朝日が昇った7時頃だった。あと少しのところまで完歩できずとても残念だった。その時聞いた話では、早い人は午前2時頃にはゴールしていたようだ。

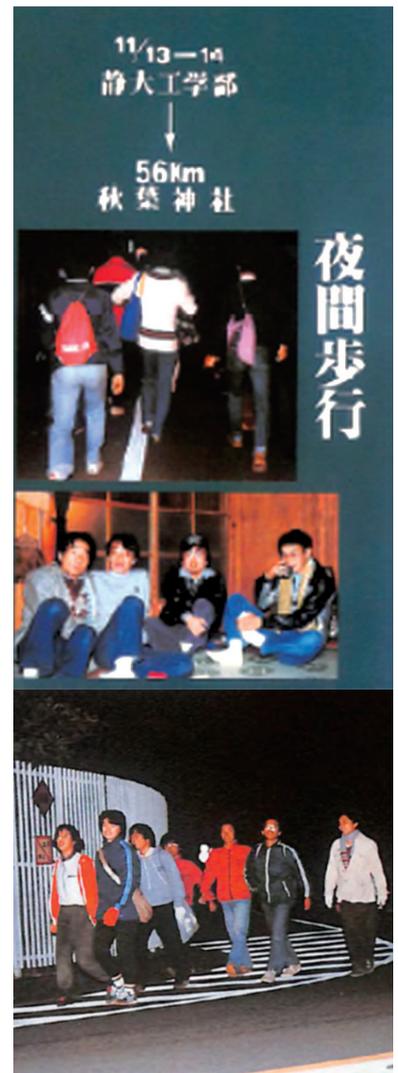
### ▶ 卒業研究から大学院へ ◀

4年生になって卒業研究として、3年の講義で興味を持った半導体の研究をしている研究室に入った。そこでは当時、非晶質半導体の蒸着膜を主に研究していた。4年生になっても前期はまだ多くの講義や「学生実験」があった。前期は卒業研究といっても、その準備のための勉強会(セミナー)が主で、本格的に卒業研究が始まったのは後期になってからだった。その後、この研究室で修士修了まで過ごすことになった。時間のかかる実験が主体の研究室なので、深夜まで時には徹夜で実験したこともよくあったが、つらくはなかった。大学院生には学会の講演会で発表するという目標があった。研究室では学生が企画した、春には潮干狩り、秋には紅葉狩りの遠足が恒例行事であった。もちろん



静大祭パンフレット 1975年

大学文書資料室蔵



夜間歩行 1983年

1983静大卒アル

忘年会や追い出しコンパなどの飲み会もあり、楽しい研究室だったと思っている。そして、私は学生生活を終え、助手として残ることになった。



集合写真

1970機械工卒アル



コンパ集合写真

1970機械工卒アル

## Column

### 沼津高専からの編入生だった学生時代

望月英二(52F)

私の浜松キャンパスでの思い出は、一緒に沼津高専から編入したたったひとりの友達以外、誰も知らない同級生たちとの記念写真撮影のページから始まる。沼津高専から静岡大学に編入した私にとって、新たな出発であった。

当時、工業高等専門学校から大学に進学する場合には、静岡大学工学部のように高専からの推薦により3年生に編入できる大学と編入試験を受けて2年生に編入する大学があった。そもそも、高専生が2年生に編入する理由は、高専の卒業では、学部に進級する条件である教養科目の単位が不足しているため、その単位を取得するためである。高専は5年間で卒業するので、静岡大学のように3年生に編入できれば、ストレートで大学に入学できるというメリットがあった。

さすが静岡大学だ、沼津高専には優しい！ と言いたいところだが、それほど大学は甘くなかった。学部3年生に編入できても、所定の教養科目の単位を取得しないと卒業できないから、

当然、編入した学部3年生は、不足している教養科目と学部の専門科目の両方取得しなければならないことになる。当時、教養科目は静岡キャンパスでの授業であったから、女子学生がとて少ない浜松キャンパスに比べると、天地の違いがあり、科目が多くて頑張りモチベーションは、そんなところにもあったかもしれない。

問題は9月と2月の期末試験期間である。それぞれ2週間で行われたが、残念ながら重なった1週間は掛け持ちで、トータル3週間の地獄のような試験期間だった。ある時、午前の静岡での教養科目の試験を終えて、新幹線に飛び乗り、既に始まっている浜松の午前の専門科目の試験中に担当の先生の部屋に転がり込み、時間遅れで試験を受けさせていただいた。先生の多大なるご協力のもと、何科目か救われた。やっぱり、静岡大学は優しかった！

### 駅伝大会

三森 悟(54K, 56MK)

1981(昭和56)年に大学院を修了しましたが、当時、新3年生を迎えての工学

部駅伝大会は、西寮グラウンドをスタート・ゴールとした、佐鳴湖を回る約20kmのコースで行われました。各チーム1区間4人が7区間を繋ぐ駅伝で、他に全区間を走破する「全区間走者」もいました。

我が化学工学科は、駅伝大会に燃えており、K4院職(4年生、院生、職員)チームは、優勝を目指して、大会前に何回か記録会(約3km)を行い、タイムを競い合いました。チームワークがポイントとなる大会のため、同じタイムの4名で各区間を編成しました。参加者及び関係者の熱意と協力の結果、4年時と院の2年間、優勝することが出来ました。佐鳴会館での祝勝会は、多くの学生、教職員で盛り上がり、翌年の優勝を誓いました。



駅伝大会(西寮グラウンド)1970年以降  
工学部70周年写真集

浜松キャンパスから出た学長 櫻場周吉先生



1963機械工卒アル

櫻場周吉先生のプロフィール

1919 (明治 43) 年	秋田県大館市で出生
1931 (昭和 6) 年	東京工業大学附属専門部卒業
1937 (昭和 12) 年	東北帝国大学理学部化学教室卒業 理学博士
1939 (昭和 14) 年	浜松高等工業学校教授
1949 (昭和 24) 年	静岡大学教授
1961 (昭和 36) 年	静岡大学工学部長 (～1965 年)
1970 (昭和 45) 年	静岡大学工学部長 (～1972 年)
1972 (昭和 47) 年	静岡大学学長 (～1977 年)
1977 (昭和 52) 年	静岡大学名誉教授
1981 (昭和 56) 年	日本分析化学会名誉会員
1982 (昭和 57) 年	勲二等旭日重光章受章

温厚で優しい櫻場先生

田形雅通(47C)

この寄稿のお話を頂き、人の名前を覚えることが苦手の私が、すぐに思い出すことが出来た貴重な先生が櫻場先生です。もう50年以上前の話となりますが、櫻場先生は、やや癖がある工学部の先生方の中であって、非常に温厚で優しい先生でした。私はそんなに出来の良い学生ではなかったこともあり、おだやかな櫻場先生に指導していただけるなら何とかやっつけていけないのではないかと考え、先生の研究室で学ばせていただくことにしました。実際に研究室でのご指導は的確で、研究室室内も温かい雰囲気でした。櫻場先生は、「学問や教養は次の行動に移る為の活性エネルギーとして貯えられなければ意味が無い」というお考えをお持ちであり、卒業後の進路も柔軟に受け止めてくださいました。そして、それが後々の私の人生を変えていくきっかけとなったと思っています。まずは、東京工業大学の大学院(修士)に進学することになるのですが、快く推薦状を書いていただいたことを覚えています。当時のコンピュータは計算速度が非常に遅く、学部学生の私の計算にも一晩を要するほどでしたが、東工大には当時の価格で5億円ぐらいのコンピュータがあり、瞬時に結果がでるので、それを使った研究をしたかったです。他の院生は修士論文のテーマに困っていましたが、私は、学部での研究を基に、「幾何異性体に最大1500気圧

までの圧をかけることにより変異するときの部分モル体積を測定し、活性化状態の分子構造を3次元的に推測する」という研究を行いました。東工大で修士課程を修えてから1年半ほど企業で働いていたのですが、うまく適応できなかったこともあり、浜松医科大学に入り直し医師を志そうと決意しました。全く違う道をいくこととなり周りは反対しましたが、前に進む気持ちを持ち続けることが出来たのは、当時の先生の柔軟な思考やご指導があったおかげと思っています。

絵描き三昧の工学部生を受け入れてくれた櫻場周吉先生

竹内栄治(47E)

櫻場先生は化学の御専門で、私は電気でしたので、学内での交流は全くありませんでした。しかし、義父の弟の故金田允美(三菱油化社長)は、時々化学同級生の仲間3人で櫻場先生のところへ飲みに行っていました。それは本田技研工業(株)の元社長の久米是志氏と住友セメントの重役であった染谷元旦氏と金田允美の3人でした。櫻場先生はいつも久米氏の事を我が事のように喜んでおられたと故人の金田より聞いておりました。その後、当時の本田の久米社長とは櫻場先生とのご縁にてお会いしたことがあり、私が発明に関わった化学装置にも久米氏にご関心を戴いたこともあります。

私が櫻場先生のお宅を訪問したのは、その事前の大学4年の時でした。私は4年の始めの頃は大学院に行く予定でしたが、個性が強いので会社勤めや大学に残るには向かないので絵描きになろうと思い、あかつき寮で絵描き三昧となり、明けても暮れても絵を描くようになりました。寮の前の道を「海の星教会」の、マルチンメアリーというイギリス人のシスターが通りましたので、親しくなり、お願いして白亜の「海の星教会」の絵を描かせて戴き、50号の油絵に仕上げました。その絵を海の星教会の近所の櫻場先生のお宅へ持ち込み、「先生、これ、先生にお渡ししたいのですが」と言いましたら、先生と奥様に歓待され、私の大きな絵を応接間に飾って戴きました。

何故、私が櫻場先生に絵をお渡ししたかは良く覚えておりませんが、感受性は強い私の事ですから、櫻場先生であれば、私が卒業を間近にして、若きウェルテルの悩みのようなものを抱き、教会を描いたのであろうことを察して戴けると思ったのであろうと思います。50年経った今も私の絵は櫻場先生と奥様の語らうお部屋にあり、櫻場先生と奥様の優しい眼差しが蘇るのです。その後も私は絵を描き続け、私の作品は総合研究棟エントランスホールと図書館の3階ホールにパーマネントコレクションとして櫻場先生の静岡大学を愛する心と共に存在しております。

## 第2節 1980年代



工学部合格発表 1980入学アル



入学式 1980入学アル

1981(昭和56)年11月、高柳健次郎が文化勲章を受賞した。浜松高等工業学校が設立され、研究と教育を重ねてきた浜松キャンパスの歴史において慶賀すべき受賞であった。その研究は受賞以降も学問の進展や時代の要請にあわせて続けられていった。

1980年代には、学問の旧体系に基づく小講座制では十分な対応ができないため、関連する小講座を複数集めて一つの大講座とし、今後の学問のありかたに機動的に対応できる組織編制となっていった。改編の結果、かつて標準的であった1学科4講座(教授4、助教授4、助手4)は、1学科2講座構成となった。これに伴い、1984年以降、光電機械工学科の新設、電気工学科、電気工学第二学科の改組、機械工学科、機械工学第二学科、精密工学科の改組、工業化学科、合成化学科、化学工学科の改組、電子工学科、情報工学科、共通講座の改組が行われ、1987年までに大講座制への転換が順次行われた。

### 1 | 1980年代の教育と研究

(本節は、中山頭氏の体験を踏まえた叙述である)

#### ▶ 教育と研究のあり方に関する議論 ◀

教員人事の候補者は、提出する個人調書に教育や研究に関する自身の見解を述べるのが求められる。その候補者の考えに対して、教授会メンバーが質問状を送るのは、今では稀だが当時は珍しくなかった。当人の思いだけで綴られた抱負に対しては、地域の環境問題に真剣に取り組む教員や、軍事研究に繋がりがねない工学研究のあり方について警鐘を鳴らす教員方から、分厚い質問状が寄せられた。教授会で披露される質問状と回答のやりとりは迫力があり、内容も興味深いものがあった。また同時に、教授会メンバー全員にとって、大学人として研究や学生の教育に携わることの責任の重さを、折に触れ考える良い材料を提供することにもなった。教授会で出される茶を吸いながら、外が暗くなるまで教育や研究について白熱した議論を交わし、またそれに聞き入るといふ良き時代であった。

#### ▶ コンピュータ環境と教育 ◀

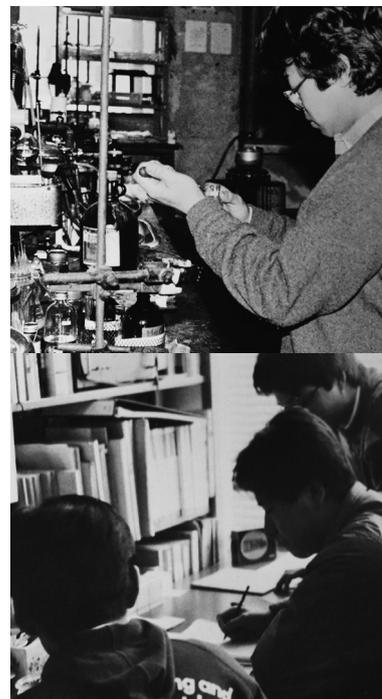
教育や研究においてコンピュータの重要性が増す中で、当時の浜松キャンパスのコンピュータ環境は、他大学と比べて決して進んでいるとは言えなかった。研究室にTSS (Time Sharing System)があるのが当然と思って赴任したものの、

想像した水準にはほど遠く、学生の教育や研究指導を行う上で不便さを感じずにはいられない新任教員も多かった。当時、コンピュータを偏重するのは学生の思考力の醸成に悪影響をもたらすとの考えが、年配の教員方の間に根強くあった。研究室の要望に応じて電話回線によるターミナルの設置が許可されたのは、1980年代も後半に入った頃であった。

### ▶ 研究室運営形態の変化 ◀

1980年代には、電気系と機械系の一部を融合させた光電機械工学科の新設や、既存機械系3学科の機械工学科、エネルギー機械工学科、精密工学科への再編、応用化学科、材料精密工学科、情報知識工学科の改編など、学科の新設や再編成が次々と行われた。また、研究室の運営形態が大きく変化していった時期でもあった。

浜松キャンパスの大規模学科においても、1人ないし2人の助手や技術職員の配置が当たり前だった旧講座制が崩れつつあった。いくつかの学科の旧講座制には、人事は各講座内で完結させ、他講座に絶対に影響を及ぼしてはならないという不文律さえあった。そのため、各講座では教授と助教授の年齢差が少なくとも20歳となるよう人事を行うことが求められていた。工業短期大学部の発展的解消は90年代に入ってからはあったが、既に大学改革の波がうごめく中、研究室の運営形態の変化に必死に抵抗する教職員が少なからず見られた。



電気系講座

1987入学アル

### ▶ 研究開発で活躍する卒業生 ◀

浜松キャンパスには、テレビの父である高柳健次郎を誇りに思い、その偉業を顧みることを通じて自身の勉学や研究に真摯に向き合い、成長の糧とするという伝統がある。1980年代は、そのような教育伝統の中から巣立った本学出身者が、産業界で大いに活躍した時期でもあった。当時不可能と言われた排気ガス規制(マスキー法)を初めてクリアーし、世界に衝撃を与えた驚異の技術、ホンダ CVCC の開発責任者は機械工学科出身の久米是志であり、80年代初頭には



電子工学研究所

1984入学アル

本田技研工業の代表取締役社長に就いていた。また、80年代後半まで続いたビデオ規格の争いを制したVHSの開発責任者で、後にVHSの父と呼ばれる日本ビクターの高野鎮雄は、精密工学科の卒業生であった。在校生がリアルタイムで目撃する諸先輩の輝かしい活躍には、通常のキャンパス教育では得られない絶大な教育効果があった。

## 2 | 1980年代の学科・講座

### ▶ 光電機械工学科の新設 ◀

科学技術の進展や産業の発展に伴い、機械工学、電気工学、電子工学をまたいだ知識・技術を持った技術者が求められるようになり、その要請に応えるために光電機械工学科が設置された。従来の電気工学科・電気工学第二学科の「電気通信講座」「電波工学講座」と、機械工学科・精密工学科の「システム工学講座」「計測制御講座」が光電機械工学科に移設され、定員45人の新学科が作られたのである。光電機械工学科の新棟は、1990年度に竣工している。



電気工学科

1984工学部案内

### ▶ 電気工学科、電気工学第二学科の改組 ◀

電気工学科および電気工学第二学科は、「電気基礎講座」「電気機械器具講座」「電力および電力応用講座」「電気通信講座」「電気計測講座」「電気制御講座」「電波工学講座」「電気物理講座」の8講座から構成されていた。

しかし、このうちの「電気通信講座」「電波工学講座」の2講座が光電機械工学科に移設されたことを契機として、1983(昭和58)年に、電気工学科と電気工学第二学科は1学科(電気工学科)に統合された。電気の基礎をこれまで以上に重視し、またこれにかかわる研究に力を入れるために「電気工学基礎」大講座を置くとともに、応用分野にも力を入れることを目的として「電気工学応用」大講座を置くという形の2大講座に改組したのであった。

### ▶ 機械系3学科の改組 ◀

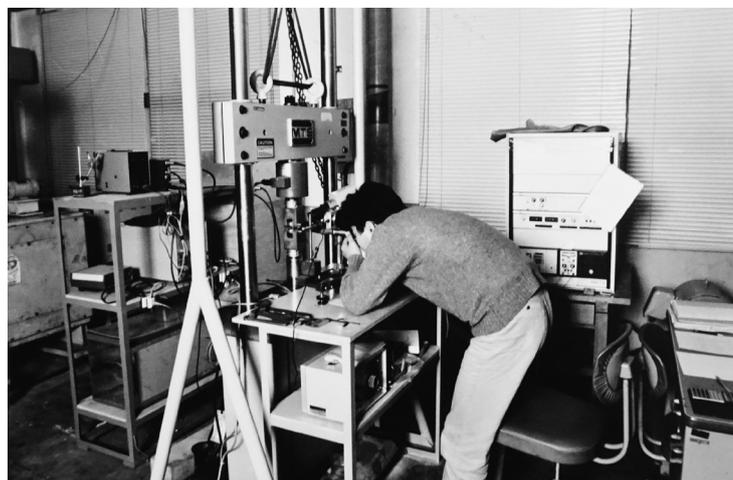
機械工学科は、1980(昭和55)年には「材料力学講座」「機械工作学講座」「熱力学講座」「流体工学講座」「金属材料工学講座」「システム工学講座(繊維工学講座から改称)」という6講座構成であった。また機械工学第二学科は「塑性工学講座」「制御工学講座」「熱および物質移動講座」「工学的解析講座」という4講座構成であった。そして、精密工学科は「精密測定講座」「計測制御講座」「機械力学および機械設計学講座」「精密加工および機械要素講座」の4講座で構成されていた。

1984(昭和59)年、これらの機械系3学科に散在していた類似講座を同一学科にまとめ、大講座制を採用する改組が行われた。

機械工学科・精密工学科から「システム工学講座」「計測制御講座」が光電機械工学科に移設され、機械工学科には「材料解析学」と「機械設計学」の2大講座が置かれ、エネルギー機械工学科には「熱エネルギー工学」「流動制御工学」の2大講座が置かれた。また精密工学科には「生産加工学」と「精密機器学」の2大講座が、光電機械工学科には「光電機械基礎」と「光電機械応用」の2大講座が置かれた。すなわち、各学科とも、従来の各講座を組み替えるなどして、2大講座制となったのであった。



機械工学科



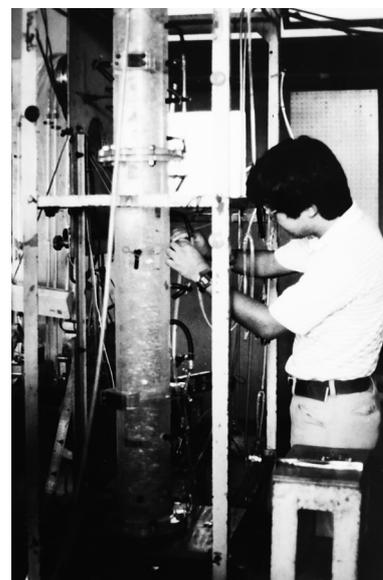
1985工学部案内 機械工学科

1986工学部案内

### ▶ 化学系3学科の改組 ◀

工業化学科は「理論無機化学講座」「有機工業化学講座」「有機反応化学講座」「無機工業化学講座」「高分子工業化学講座」「工業分析化学講座」の6講座であった。1962(昭和37)年には石油化学工業からの需要に応じ、合成化学科が新設された。合成化学科は、「工業物理化学講座」「有機合成化学講座」「有機製造化学講座」「無機合成化学講座」の4つの講座から構成されていた。また、化学工学科は「拡散単位操作講座」「機械的単位操作講座」「反応工学講座」「化学工場計画講座」の4つの講座で構成されていた。

その後、1986年に材料精密化学科が新設され、工業化学科と合成化学科のなかで材料に関する研究を行う教員が担当するようになった。また工業化学科は応用化学科として再編され、新たな体制で臨むことになった。さらに、化学工学科は時代の要請に応える形で「生物化学工学」の研究内容を取り入れていった。



化学工学科

1985工学部案内

### ▶ 電子系2学科、共通講座の改組 ◀

電子工学科は「電子回路講座」「電子物理講座」「電子管講座」「電子応用講座」「電子数学講座」「電子装置講座」の6つの講座で構成されていた。社会の要請によって研究内容にセンサ工学と通信・電子応用システム分野が新たに加えられるなどの変更があった。

共通講座は各学科が改組によって新たに取り入れた新分野や境界域の基礎教育を充実させるため、「応用理学」と「工学基礎」の2大講座に改組された。



電子工学科

1985工学部案内

### ▶ 情報工学科 ◀

1971(昭和46)年に設置された情報工学科は、当初は「情報基礎理論講座」「情報基礎技術講座」「計算機システム講座」「情報システム講座」の4講座であった。

しかし社会の急速な情報化に伴い、人間との親和性の高い情報処理方式が模索される中、計算機と情報システムやインタフェースの改善の社会的要請に対応するため、1987年に情報知識工学科と改称するとともに、「計算機システム」「知識工学」の2大講座に改組した。



情報工学科

1985工学部案内

## 3 | 1980年代の学生生活

(本節は、福田充宏氏の学生生活の思い出からの叙述)

### ▶ 大学入試共通一次世代 ◀

私が入学した1980年は、共通一次試験2年目の代であり、当時は機械工学科及び機械工学第二学科(M)、精密工学科(F)、電気工学科(E)、電子工学科(D)、工業化学科(C)、合成化学科(S)、化学工学科(K)、情報工学科(J)の8学科(9学科?)体制であった(その後1984年に光電機械工学科、1985年にエネルギー機械工学科ができ、1986年に工業化学科と合成化学科が応用化学工学科、材料精密化学科に、

1987年には情報工学科が情報知識工学科と名称変更した)。1年次と2年次は教養課程を静岡キャンパスで過ごし、単位基準を満たすと浜松キャンパスの専門課程に移行できた。単位を落とすと静岡キャンパスに取り残されたり、浜松キャンパスから静岡キャンパスに通わないといけなかったりするため、皆それぞれには単位取得に必死だった。



入試



合格発表

1984入学アル

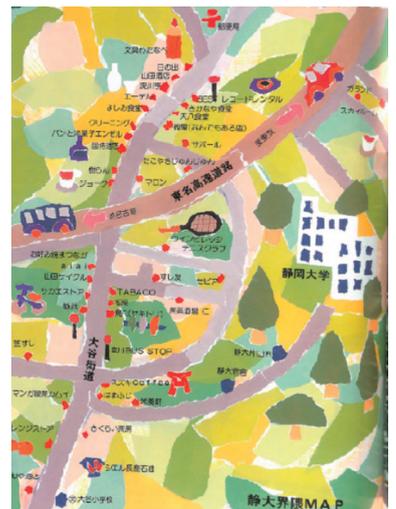
### ▶ 静岡キャンパスでの学生生活 ◀

静岡キャンパスの教養課程では、日本文学、心理学、哲学、英語、第2外国語といった教養科目や、数学、物理、化学等を学ぶと共に、先生が浜松キャンパスからやってきて、専門科目の一部が開講されていた。大学入学当時英語が苦手だった私は、ドイツ語であれば他の人と差がない、と第2外国語として履修したドイツ語を一生懸命勉強し始めたものの、1ヶ月くらいで挫折してしまったことを覚えている。静岡キャンパスでは人文学部や教育学部に高校からの同級生も多く、工学部に比べて他学部の試験の少なさをうらやましく感じていた。

学外では、大学近くの喫茶店の名前が「サポール」という名前で、ネーミングの妙には感心したし、定食屋の「坊ちゃん」(2013年の閉店は新聞でニュースにもなった)には、焼き肉定食がお気に入りですぐ友達とよく食べに行っていた。当時の大学の周りのアパート(下宿)は、風呂と台所が共有で廊下をはさんでたくさんの部屋が並んでいるようなところが多く、昼休みに友達の家で「笑っていいとも(1982年開始)」を見に行ったり、夜は誰かの部屋に集まって麻雀をしたり、などといったこともよくあった。その当時のデートの定番はドライブで、松田聖子の「青い珊瑚礁」を聴きながら由比バイパスをドライブしたことは昨日のように思い出される。

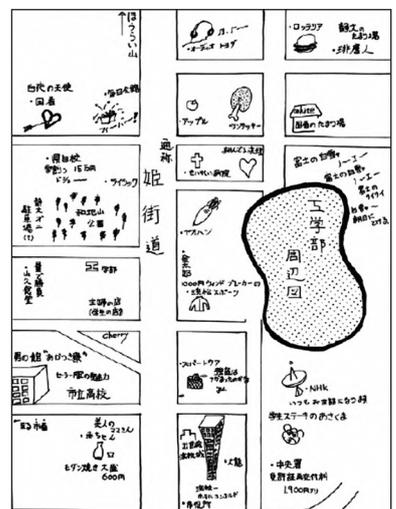
### ▶ 浜松キャンパス専門課程 ◀

浜松キャンパスでは、いよいよ専門科目の履修が本格的に始まり、製図や実験、工作実習などにも多くの時間を費やした。製図では、1人1台ドラフターが与えられ、冬はストーブをつけて(本来の時間内は大抵友達と話をしながら進んでいなかったので)夜遅くまでみんなで図面を書いていた。工作実習では、旋盤やボール盤はもとより、歯切り盤、鍛造、鋳造、といった今では実習で行われなくなったものも行っていた。



静岡キャンパス周辺マップ

1983静大卒アル



工学部周辺図

1983静大卒アル



生協食堂

1983静大卒アル

3年次には、「厚生補導特別企画」といった行事があり、私の時には飛騨高山に一泊二日の旅行に行ったが、先生方とも一緒にお酒を飲みながら話ができ、学生と教員の距離は非常に近かったと思う（さらに帰る途中には名古屋のビール工場に寄った）。

4年次には講座に配属されて卒業研究を始めることになるが、初めてコンピュータでBASICプログラミングを学び、データの保存は5inchのフロッピーディスクであった。また、図はトレーシングペーパーにロットリング、ゼミの文献複写は青焼き、各研究室には暗室があって写真は自分で現像、といった時代であり、ようやく学会発表にOHPが使われだしたころであった。ワープロも使われ始めたが、私が修士論文を書いたときには、表示はわずか2行で保存はカセットテープ、といった今では考えられないものであった。当時、大学院への進学率は20%強であり、大学院生は院生室に居を構え、部屋にはベッド、ソファ、テレビもあって、あとは風呂さえあれば大学で生活できると思ったものである。

行事も、駅伝大会では機械工学科と化学工学科が毎年バトルを繰り広げ、ソフトボール大会では講座のチーム、院生のチーム、教職員チームと、多くのチームが参加して盛り上がっていて、活気にあふれたキャンパスであったとともに、他の講座の学生や先生とも交流を深める機会が多かったと思う。学外では、鹿谷にあった「お好み焼きや 赤ちゃん」が、学生や卒業生が(先生たちも)集まる行きつけの飲み屋であったが、ママさんが2004年1月に他界されたことは非常に残念であった。

## ■1980年代の工学部■



電気・電子工学棟



図書館



合成化学棟



工業化学・化学工学棟



工学会館



機械・精密工学棟

## 駅伝大会

福田充宏(59M)

(現静岡大学工学部教授)

当時の駅伝大会は、西寮グラウンドをスタートして佐鳴湖西岸の公園で折り返し、また西寮グラウンドに戻ってくるコースであった。名目は浜松キャンパスにやってきた3年生を歓迎するためであったが、積極的に楽しんでいただけたのは4年生や院生、教職員であり、特に機械工学科と化学工学科では、4月に入ると



駅伝大会



駅伝大会



厚生補導特別企画での先生方院生との夕食 ビールの多さに注目

和地山公園で練習を始める熱の入れようであった。

4人一組で走るために、“如何に4人のタイムを揃えるか”が重要であり、4月からのタイムトライアルを経てチームを組み、各区間を実際に何度も走りに行き、シミュレーションを行っていた。機械工学科では、走るのが苦手な教職員までほぼ全員が練習に参加しており、教職員も学生も、「研究や教育だけでなく、遊びも全力投球」といった雰



院生室



実験室



実験室

福田充宏提供

囲気であった。

## 学生時代を振り返って

鈴木眞一(59F)

私は1980年4月に精密工学科の学生として入学し、2年間の静岡での教養課程のあと浜松に移動し、1982年4月～84年3月の2年間を浜松キャンパスで過ごしました。出身は姫路ですので、静岡も浜松も下宿でした。浜松の下宿は、高校野球の強豪校である浜松商業高校のすぐ隣で、野球部が練習する際の金属バットの発するキンキンという音が毎日うるさいくらい聞こえてきました。キャンパスの近くではありましたが、正門までは遠く、近道のためキャンパスのフェンスの破れ目をくぐって日々通学しました。

浜松キャンパス時代は、ほどほどに遊び、よく遊んだと思います。学びについては、試験前の準備が相当に大変で、毎夜遅くまでがんばった記憶があります。遊びに関してそれほどお金に困った記憶はないのですが、いろいろとアルバイトをしました。家庭教師系ではなく、体を使う単発のアルバイトが多かったです。イベントの会場をセットするアルバイトは食事つきだったこともあり、長くつづき、つい最近まで年賀状のやりとりを続けていました。浜松駅の南にあったヤマハにいき、特許案件調査として大量のバイク雑誌を数人でひたすら読んで、指定された内容の記事が掲載されていないか調べたのもちょっと変わったアルバイトとして思い出します。

## 4 | 博士課程大学院電子科学研究科の設置

### ▶ 設置の経緯

電子科学研究科は1976(昭和51)年4月にお茶の水大学人間文化研究科と共に新制大学として初の博士課程後期3年の独立大学院として設置された。当時の文部省は新制大学に博士課程を設置する申請書には、それぞれの大学の特色を反映していることを条件としていた。静岡大学では、電子工学研究所や工学部の研究教育で実績のある学問領域を基に、「電子科学」の理念を新たに導入し、その

## Column

### 電子科学の意義

材料科学、情報通信、資源エネルギー、食料環境、ライフサイエンスなど地球規模の課題に対して、人類は先導的、革新的な科学技術を創生しなければならない時代を迎えつつある今日、電子科学はあらゆる先端科学技術並びに新産業創生の基盤として、その重要性はますます増大している。このような動向に対応し、快適な生存と自然界との共生を人類共通の基本理念とし、人間と自然に優しい電子科学の更なる発展拡充を目指し、高度な専門知識並びに広い視野に立った清新な知識と自己啓発に基づく自立した研究開発能力を有する人材の育成を教育の基本理念としている。

## Column

### 電子工学と医学の境界領域の開拓

近年の医療技術に於いては、電子技術を抜きにしては成り立たない。従って、医学と工学、ことに電子工学との境界領域の研究者、高度な専門技術者が求められていることに鑑み、設置目的においても医学と電子科学の境界領域の開拓という目的が上げられ、本研究科に客員講座を設け、浜松医科大学との協力研究教育がなされてきた。その成果として、医学と電子科学の学際領域に个性的かつ特徴のある、学術博士を世に送り出し、かつ境界領域を取り扱う研究者、即ち、医学の心得と知識を有する研究者の養成と医学研究者と電子工学研究者の協体制を作った。

浜松の地域的特徴と歴史的背景に基づき、電子科学(光、電子、情報科学)と医学応用の学際領域の分野に於いて、特徴ある拠点形成を目指した。

高い創造性を盛り込んだ博士課程設置申請書により文部省の意向に応え、大学設置審議会の承認を得るに至った。「電子科学研究科」の名称にはこのような経緯を反映しその発展性を期待する思いが込められている。

電子科学研究科は電子材料専攻6講座、電子応用専攻7講座と浜松医科大学との連携のための2つの客員講座で構成され、担当教員は電子工学研究所16人、工学部28人、浜松医科大学4人、学生定員17人で発足した。西田亮三初代研究科長の下に第1回生4人の合格者を決定し、1976年6月30日に最初の入学式を挙行了した。

電子科学研究科の設置は静岡大学の画期的な成果であり、浜松キャンパスの教職員および学生に高揚感をもたらす出来事であった。

## ▶ その後の変遷 ◀

電子科学研究科発足後も講座増と担当教員の増加を図るための努力を継続し、1983(昭和58)年に4講座の増設と担当教員12人、学生定員4人の増員が認められた。

1996(平成8)年、両キャンパスにまたがる理工融合の理工学研究科博士後期課程が設置された。新設の理工学研究科には電子科学研究科から多くの担当教員が移籍され、電子科学研究科には電子工学と電子科学の分野および浜松医科大学の教員が残留する棲み分けが行われた。担当教員を減じた電子科学研究科は学生の充足率の低下に悩まされることとなったが、産学連携による社会人学生と大学院の国際化による留学生受け入れを積極的に推進して充足率を回復した。この背景には電子科学研究科設立以来の研究教育への取り組みに対する高い評価に負うところが大きい。これは、1999年に畑中義式第6代研究科長が実施した外部評価によって裏付けられている。

2005年に、ナノビジョン工学専攻3講座の新設と既設講座名の変更を行い、3専攻18講座の編成となった。これには2004年の「21世紀COEプログラム」に採択された「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」を支える意味合いがあった。このプログラムはきめ細かな研究計画を基に着実に業績を伸ばし、中間および最終審査において高い評価を得た。

## ▶ 電子科学研究科の廃止 ◀

2006(平成18)年4月、電子科学研究科、理工学研究科および農学系連合大学大学院の一部を統合した博士課程の創造科学技術大学院が設立され、電子科学研究科は学生募集を停止した。学生在籍者が零となった2011年3月に電子科学研究科は廃止された。

電子科学研究科が発足以来2011年3月の閉鎖までの35年間の学位授与数は課程博士324人、論文博士109人にのぼり、高度人材の育成で大きな足跡を残すことができた。

浜松キャンパスと女性



塩川祥子先生のプロフィール

1943 (昭和 18) 年	福岡県福岡市博多区で出生
1971 (昭和 46) 年	東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了 (工学博士)
1971 (昭和 46) 年	東京工業大学 助手 (～ 1986 年)
1986 (昭和 61) 年	静岡大学工学部 助教授 (～ 1990 年)
1991 (平成 3) 年	静岡大学工学部 教授 (～ 2003 年)
2004 (平成 16) 年	SAW&SPR-Tech 有限会社代表取締役社長 (～ 2022 年) 専門は超音波工学・波動エレクトロニクス

静岡大学工学部初の女性教官となって  
塩川祥子

1986(昭和61)年、私は、43歳で工学部光電機械工学科助教授に採用されました。1985(昭和60)年の公募条件に33歳以下という年齢制限がありました。どのようにそれを乗り越えていったのか、その当時のことや17年間の単身赴任生活と退職し今思うことなどを綴ります。

1985(昭和60)年の学会誌に助教授公募が掲載され、助手だった私は、この学科が光・電気・機械という多様な分野であることなどから研究と教育をここで実現したいと思いました。応募書類に次のような手紙を添えて提出したのです。33歳以下という年齢制限は男性用で、女性は出産子育ての時期であり女性には適用しないで研究業績と熱意・抱負などで評価してほしいと書きました。また、国立大学でこそ女性登用を率先して進めてほしいとも。

1985(昭和60)年は「国際婦人の10年」ナイロビ世界会議が行われ、これに先立つ1979(昭和54)年には女性差別撤廃条約が国連総会で採択されていましたが、日本はまだ批准していませんでした。国内では批准を求める全国運動が展開され(1985年批准)、大学でも事務系女性職員が昇格を求めて人事院提訴を行いました。大学の教職員組合では、研究に携わる女性の技官、教務職員、助手の実態調査が行われ、地位向上について議論がされていました。私もこの運動に触発され、大学で何をしたいのかを考えて応募することにしました。周りは、無理でしょうという意見ばかりでしたが、ダメ

でもともとという気持ちで挑戦したのです。ところが私を受け入れる意見があり、書類審査、面接を経て採用に至りました。念願の浜松での教員生活がスタートしました。

15年間の東京工業大学助手から静岡大学工学部の教授会メンバーになり、改めて大学の仕組みを知ることになりました。例えば、入学や卒業をはじめ退学・留年など学生の一生に関わる決定などが行なわれています。教官人事や定年年齢なども教授会の決定事項です。大学と政治の分野が一番セクハラやパワハラ(アカハラ)が多いといわれているのは、大学人が権力者としての自覚がないからではないと思います。また、大学は、学生、職員、教官で構成され、お互いの信頼を基に力を合わせていくことで不祥事も乗り越えられます。

17年間の単身赴任生活でしみじみと思ったことがあります。それまで女性は家事・育児をやらされ、自分の時間が皆無という思いが強かったのですが、アパートで一人になってぼんやりとしてい

た時に家事・育児をやらせてもらっていたことにハッと気が付き、不満が感謝に変わったのです。立場を変えることにより見方が変わること気づかされたのは、普通では得難い経験でした。

この間、約100名の学生の卒業研究を指導し社会に送り出すことが出来ました。教えるというより一緒に研究し新しい結果や発明をする喜びの年月を過ごしました。在職中に学生と共に得た経験や発明・発見を基にして2004(平成16)年に静岡大学発ベンチャー企業を設立するに至りました。そして2022(令和4)年に17年間の企業活動を終了しました。

これまでの人生を通して、挑戦することの大切さ、人が作る決まりは熱意と理由があれば変えられることなどを経験しました。また、次の一步を踏み出すには社会的な連帯を持ち、自分と同じ悩みを持っている人が大勢いることを知り勇気を得ます。浜松での教員生活と企業活動に感謝し、100周年の記念誌に登場できることを誇りに思っています。



教職員組合婦人懇談会200回記念の日に 1997.1.21

教職員組合蔵

## 工学系女性教員数の推移を追う

工学領域数理システム工学系列  
教授 宮崎倫子



私は、1998(平成10)年工学部システム工学科助教授として着任しました。その際、同じ学科に工学部の女性教員第1号の塩川祥子教授、そして、共通講座(数学)に私と同世代の女性の助教授がいらっしゃいましたが、ほかに女性教員がいたかどうか、正確な情報は得られませんでした。実際、2015年以前については、女性教員数の推移についてのデータは存在しないようです。2015年以降現在にいたるまでは、工学領域の教員数180名

程度に対し、女性教員数は、4、4、5、5、6、7、8、11名と推移しています。正確なデータが存在しない2015年以前もおそらく、多くて4名程度というのが続いていたのではないかと思います。

2004(平成16)年国立大学法人化に伴う中期計画に、女性教員採用の促進が掲げられ、教員の選考においては能力が同等であれば女性やマイノリティーを優先することになっていましたが、工学部において女性教員数が増える原動力にはならなかったようです。その後、もう少し踏み込んだ女性限定枠の教員公募が、2019年以降の女性教員増加につながったと考えられます。

国連の女性差別撤廃条約の批准に向けて男女雇用機会均等法が改正された1985年、私は学部生でした。この改正をきっかけに、当時の女子学生の働くことへの意識はとても高まっていたように感じます。就職活動では「総合職」(男性と同等に働く)を目指したい、という友人も多くいました。しかし、当時はパブル景気で企業への就職が非常によかったこ

ともあり、大学院へ進学する女性はさほど増えず、大学の女性研究者が増える要因とはならなかったように感じます。

実際、静大工学領域における先述のデータが示す通り、工学部の女性教員数は横ばいが続きました。しかし、この間女性が働きやすい環境はどんどんと整備されていったことを実感します。私事で恐縮ですが、第1子が生まれた時には、科研費は育児休暇を取得する場合放棄する必要がありましたが、第2子が生まれた時には、育児休業による研究期間の延長が認められるようになりました。学会では、託児サービスが設けられるようになり、静岡大学においても、学会などで託児サービスなどを利用した際の補助金や、育児や介護に対して、研究支援員雇用制度などが設けられました。また、浜松キャンパスでは長期休暇中の学童保育が行われ、我が子たちも利用させてもらいました。この学童保育は、工学部教員の協力による実験などのイベントも提供され、静大浜松キャンパスならではの運営がなされていることを申し添えておきます。

## 情報学部的女性教員の推移を追う

情報学部情報社会学系列  
教授 笹原恵

私は、1995(平成7)年10月の情報学部設置の折に講師として本学に着任しました。その時、情報学部は2学科制でしたが、情報科学科の女性教員は赤石美奈助手1人、情報社会学科には、長瀬真理教授、森野聡子助教授、V.A. ウィルキンソン助教授、そして私の4人の女性教員がいました。当時、情報学部の教員数は62人(情報科学科23人、情報社会学科39人)でしたので、女性教員比率は8%ほどということになります。2022(令和4)年10月現在、情報学部の教員65人のうち女性教員は13人で、20%になるので、27年間の間に3倍になったことがわかります(情報科学科26人中1人、行動情報学科16人中2人、情報社会学科23人中10人)。第4期中期目標期間(2022.4.1~2028.3.31)の全学での女性教員割合の目標が20%なので、情報学部としては一足先に目標を達成したことになりますが、情報科学科ではまだ女性教員が少ない状況にあります。

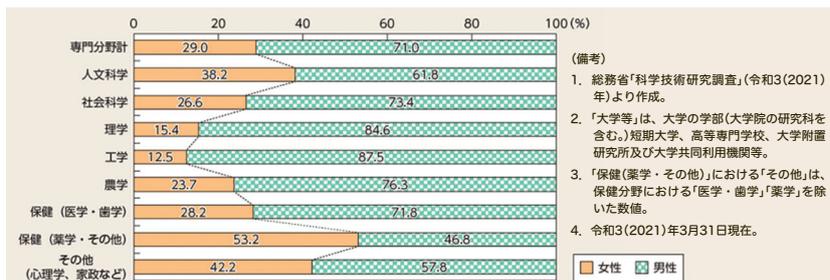
そもそも研究分野における女性と男性の差異はよく指摘されています。2021年の「科学技術研究調査」によれば、人文科学分野における女性比率は38.2%、社会科学分野においては26.6%であるのに対し、理学系分野に占める女性比率は15.4%、工学分野に占める女性比率は

12.5%と低くなっています。研究分野のこの違いは当然のことながら学部在籍者数の差異からきています。現在は「リケ女」(理系女子の省略形)を増やすために政府も施策を打ち出しています。理工系の女性教員が増えることはロールモデルを女子学生に提示することにもつながります。

所属等	女性	男性	合計	女性教員比率
人文社会科学領域	25	65	90	27.8%
教育学領域	27	80	107	25.2%
情報学領域	11	52	63	17.5%
理学領域	10	64	74	13.5%
工学領域	11	163	174	6.3%
農学領域	7	60	67	10.4%
融合・グローバル領域	17	27	44	38.6%
合計	108	511	619	17.4%

静岡大学領域別 男女別教員数・女性教員比率

2022年5月1日現在



専門分野別に見た大学等の研究本務者の男女別割合(2021年) 令和4年度「男女共同参画白書」より

# 第4章

## 浜松キャンパスの大再編

2021年全景

2021年12月(静岡新聞社ヘリ「ジェリコ1号」から撮影)



# 第 1 節 四年一貫教育と情報学部を設置

## 1 | 教養部の廃止と四年一貫教育

### ▶ 工学部の四年一貫教育要求 ◀

2000(平成12)年4月から始まった浜松キャンパスにおける四年一貫教育は、工学部側からみれば、検討を開始してから15年を経て実施された。

まず、1985(昭和60)年に発足した工学部・工業短期大学部将来構想検討委員会で、四年一貫教育の考えが出された。1986年に、工業短期大学部、工学部、教養部の三部局による合同委員会(委員長：学長)が発足し、両部局より四年一貫教育の考えが示されたが進展はなかった。

1990(平成2)年7月の工学部教授会は四年一貫教育を浜松キャンパスで実施する意向を表明した。そして1991年11月の将来構想委員会学部等部会第1次答申で、学部四年一貫教育を可能にする体制をつくると答申した。

### ▶ 大学設置基準の大綱化 ◀

同じ1991(平成3)年、大学設置基準が改正され、カリキュラムの科目区分と卒業に必要な単位数を各大学が独自に設定できるようになった。このいわゆる大学設置基準の大綱化以前には、すべての大学で「一般教育科目」「外国語科目」「保健体育科目」「専門教育科目」等の科目区分と、各科目区分の卒業必要単位数が共通していたが、この大綱化に伴って多くの大学で科目区分の改正、および卒業に必要な一般教育科目の単位数削減が行われた。

静岡大学においても大綱化への対応として教養教育カリキュラムが改正され、その後の幾度かの改正を経て、現在では卒業に必要な一般教育科目(現在の静岡大学の科目区分では「教養科目」)の単位数は工学部で26単位、情報学部で28単位といったように学部ごとに異なっており、その内訳も各学部で異なる設定がなされている。

### ▶ 教養部の改組と新学部構想 ◀

このような一般教育科目の単位数削減と並行して、一般教育科目の担当部局であった教養部の改組が多くの大学で進むこととなった。教養部改組の形態は、教養部所属教員を既存の学部に分属させるものと、教養部を母体として新学部を設置するものに大別できる。静岡大学では新学部設置の方向で検討がなされ

た。当時の教養部将来構想委員会では福祉系新学部や国際系新学部設置の方向なども検討されていたが、最終的には工学部情報知識工学科(1995年のみ知能情報工学科、以下も同様)を母体とする工学系情報学科と教養部文系教員を主体とする文系情報学科を持つ情報系新学部の設置を目指すこととなり、1995(平成7)年10月の情報学部設置と入れ替わるように教養部が廃止されることとなった。

1995年7月の評議会は、将采的な方向として、静岡大学としての総合性・一体性を確保しつつ、各学部は同一キャンパスで四年一貫教育が実施できる体制を目指すことを承認した。



教養部の教員 1995年3月

## ▶ 教養教育の新体制と浜松キャンパス ◀

教養部が設置されていた当時は、静岡大学の全学部の学生が1、2年次には静岡キャンパスで学び、工学部生は3年次から浜松キャンパスで学ぶという体制だった。この当時は休学・復学といった学籍の管理や取得単位数・成績の管理といった教務上の管理の点では、1、2年次の学生は事実上、教養部所属であり、学生たちの指導教員も教養部の教員が担当していた。2年次から3年次に進級する際に一定の基準を満たしていれば3年次から完全に学部所属となり、工学部生は浜松キャンパスでの学習をスタートさせるというかたちであった。

教養部を母体の一部とした情報学部の場合も、発足時は、1年生を静岡キャンパスで教育し、2年次から浜松キャンパスで学ぶ形でスタートした。このため、1996(平成8)年6月の情報学部教授会は四年一貫教育を目指すことを決定した。第一段階として、1997年10月の評議会は、工学・情報両学部の四年一貫教育への移行時期は2000年度を「目途」とすることを承認した。しかし問題は、教養教育の条件整備の経費であった。このため、工学部・情報学部は四年一貫教育の施設・設備費の負担方法を検討し、1998年11月の両教授会でその原案を承認した。その原案に対し各部局の賛成が得られたので、1999年2月の評議会は四年一貫教育を2000年度より実施することを承認した。

教養部廃止に伴い、教養教育は静岡大学全体で担当することとなり、これを担保するために教養科目の科目区分に対応した科目部会が設置された。全教員がいずれかの科目部会に登録することになり、教養教育は科目部会の責任の下で実施される体制へと移行し現在に至っている。

## ▶ 情報学部の整備と浜松の人文系教養教育体制 ◀



情報学部2号館西側 1997年

2000情報卒アル

情報学部第一期生が2年生になるのに合わせて、1997(平成9)年には情報学部2号館の西半分が完成し、その後に残りの東半分が完成したことにより、情報学部の全教員が浜松キャンパスに研究室を持つこととなった。これにより浜松キャンパスにおいて、特に人文社会科学系の教養教育を担当する人員が確保可能となり、工学部・情報学部の学生全員が1年次から浜松キャンパスで学ぶという、いわゆる0-4体制が完成し浜松キャンパスの四年一貫教育が実質的に始まることとなった。

## ▶ 教養教育の条件整備と経費問題 ◀

浜松キャンパスにおける四年一貫教育のところで、「工学部・情報学部は四年一貫教育の施設・設備費の負担方法を検討し、1998年11月の両教授会でその原案を承認した。」と書いたが、この点をもう少し詳しく説明しよう。

施設・設備の条件整備案に基づき大学本部で必要経費を算出したところ、245,473千円となった。評議会終了後、両学部長は事務局長からこの金額を提示され、複数年かけて整備せざるを得ないので、四年一貫教育の実施を1年延期してはどうかとの打診を受けた。両学部長は検討させて欲しいとその場を引き取り、相談の結果、予定通り2000(平成12)年4月実施とし、全学が納得する施設・設備費の負担案を作成することとした。2000年4月に実施するために各局の教授会において1回で承認が得られるよう費用負担を検討した結果、本部経費34.8%、工学部44.2%、情報学部9.3%、電子工学研究所1.3%、他部局合計10.4%を負担する原案を作成した。両学部は、必要経費捻出のため教員の研究費から理系教員30万円、文系教員22.5万円、電研教員10万円負担することを含めて、1998年11月の教授会で原案を承認した。その後、教員が負担した同額の金額は工学振興基金から研究費として配分された。

工学部長からこの原案の説明を受けた経理部長は驚き「工学部は大丈夫か」と問われた。この案に示された両学部の熱意が本部事務局に伝わり、その後の整備に大きな成果となって現れた。総合研究棟の新築要求の時、設置目的外の移行学生に対する教室の必要面積を含めて新築計画が作成され、文科省と紆余曲折があったものの申請通り認められ、現在の10階建ての総合研究棟が2002(平成14)年7月に落成した。それにより当初合同棟2号館に計画された食堂増設は、計算機棟を改修し北会館として整備された。

## 2 | 文工融合型新学部の発足

### 工学部情報系からの情報学部設置判断

(以下は、初代情報学部長阿部圭一氏の個人的体験を含む設置経緯文である。)

それは、1994(平成6)年2月に佐治武志教養部長ほか工学部に来られ、「浜松に情報系の学部を作りたいので協力して欲しい」と言われたことから始まった。当時、全国の国立大学で教養部を廃止し、新学部を作る方向にあった。

群馬大学では、教養部の一部の教員に工学部情報系学科の教員が加わって1学科の社会情報学部を作った。しかし、本学の情報知識工学科は未だに学生定員1学年40人、4講座であったから、それを2つに割ることは得策でないと考えた。そこで、情報知識工学科が丸ごと工学部から分離して新学部の情報科学科となり、教養部から移る一部の教員で作る文系の学科との2学科案を提案した。

文部省高等教育局大学課との何回かの熾烈なやり取りの末、9月には文部省から大蔵省(1994年当時。現在の財務省)への概算要求案に入った。学部名はすっきりした「情報学部」で落ち着いた。文系の学科名は「情報文化学科」が有力であったが、建物の設置基準面積の関係で「情報社会学科」にするようにという指導があり、変更した。個人的には、情報社会を情報科学技術と社会学の両面から考察するという意味で、時代の要請に合った学科名であったと思う。

名古屋大学情報文化学部がすでに文理融合の情報系学部であったので、情報学部は「文工融合」を旗印とした。1995(平成7)年3月に設置が認められ、10月に情報学部が発足、翌1996年4月に情報科学科100人、情報社会学科100人の1期生200人を受け入れた。

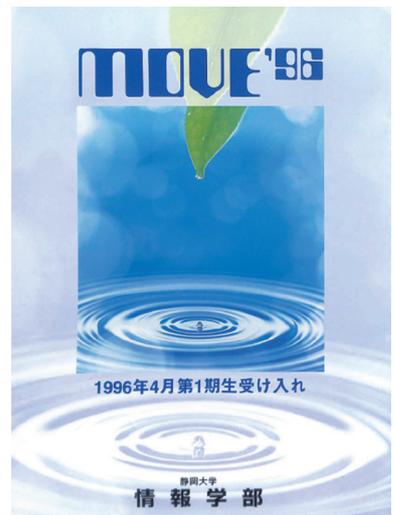
### 情報社会学科に行き着くまで

(以下は、情報学部選出の初代評議員であった鎌田哲宏氏の個人的体験を含む経緯文である。)

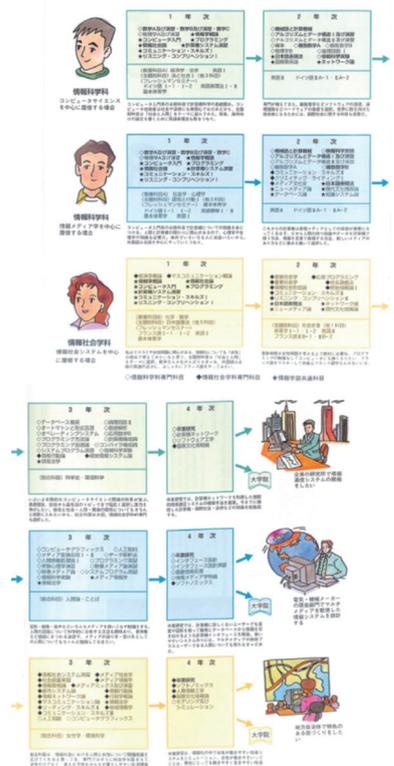
1991(平成3)年の大学審議会第二次答申により教養教育と専門教育の枠がはずされ、静岡大学では法経短期大学部、工業短期大学部、そして教養部を廃止し、新しい学部を作ることになり、学内に嵐が巻き起こることになる。全学の将来構想委員会が募集すると、実に64もの学部案が寄せられた。とりわけ以前から法経学科と人文学科の分離独立の要望が強かった人文学部は理学部を巻き込み、人文学部、政策科学部、自然科学部、浜松地区に人間情報学部を新設するという提案を出す。2学部増設はとても無理で、結局、人文学部内に新しく社会学科を増設することで収まりがかった。

将来構想委員会は、教養部の国際交流学科案と福祉共生学科案、さらに理系の人間環境学科案の3案を評議会に提案するが、評議会は国際交流学科案を採択し、教養部長に具体的作業を指示する。教養部では教養部改革検討委員会が国際コミュニケーション学部案を作成し、教養部長を中心に第一回の文部省ヒアリングに臨んだが、そこではけんもほろろの対応であった。

文部省(1991年当時。現在の文部科学省)は、あらゆる分野にコンピュータが



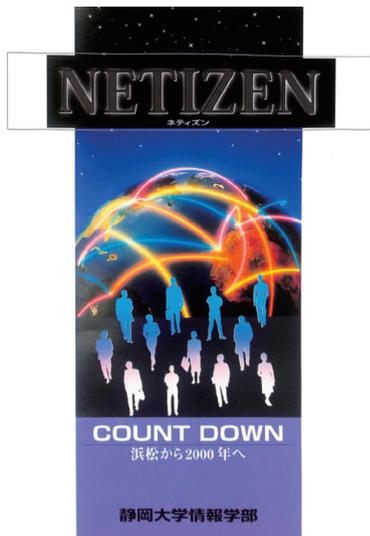
MOVE1996表紙



MOVE1996紙面



MOVE1997表紙



NETIZEN表紙

入り込み、急速に進む情報化社会に対応した従来の枠を超えた全く新しい学部を作る必要に迫られていた。その学部案は大蔵省や総務庁などへの概算要求を通し、尚且つ大学設置審議会の審査を通るものでなければならない。これはかなりの難問であったが、この難問をクリアできる力量を持った大学として静岡大学に白羽の矢を立てていたのである。第一回の文部省ヒアリングで与えられたヒント「従来とは違った切り口」で「情報」が浮かび上がり、情報関係の新学部設立が現実化されていった。

工学部の情報知識工学科が新学部に移行して「情報科学科」となり、文系の学科と合わせて2学科から成る国立大学初の文工融合型学部が構想されることになった。問題は文系の学科で、はじめは「国際コミュニケーション学科」を持って行くが、文部省の意向に沿わず、その後「コミュニケーション学科」→「情報コミュニケーション学科」→「情報文化学科」とヒアリングの度に名称を変えて行くが、いずれも内容が不十分で、ついに業を煮やした文部省側は「これで社会科学と言えるんですか！」と発言、これが最後のヒントとなり、ようやく社会学を中心とした「情報社会学科」が確定することになった。

早速、大学設置審議会の本審査のための書類作りを開始したが、最も苦勞したのが人材であった。情報社会学科に相応しい新しいユニークな授業科目を多く設定したが、担当する教員が足りない。そこで広く他大学の情報を集めて、教育研究にコンピュータを利用している優れた教員を一本釣りし、また文部省も新聞社や一般商社などから情報にかかわっている優秀な社員を紹介してくれた。こうしてできあがった「情報学部」案はすべての審査を通過し、最速最短で設置が正式決定されたのである。

## Column

### 文工融合を楽しむ

初代情報学部長 阿部圭一  
(静岡大学名誉教授)



阿部圭一 初代情報学部長(1995-2000)

1995年9月の情報学部準備委員会で初代学部長に選出されてしまいました。工学部の先生から「文系の入った教授会は大変でしょう」と言われたりしましたが、皆様のご協力で、それほどでもありませんでした。むしろ、学部長の仕事を楽しんでいた面もあります。もともと文学部に行くか工学部に行くか迷っ

た人間ですから。

情報知識工学科が工学部から抜けて情報科学科を作るという選択は、教養部も事務局も「瓢箪から駒」であったようです。おかげで、文部省にたいし「文工融合」という強力なアピールができました。

後に、ある先生から「融合、融合と言うけれど、AとBがくっただけじゃ

駄目。間にAでもBでもない合金のようなものができて初めて融合だ」と言われました。情報学部は最初から合金があって発展しました。

4年間は私も情報学部全体も無我夢中で走っていました。その後の発展の基礎が築かれたのは、次の徳山博于学部長の力が大きかったと思います。



情報学部創設記念式典 1995年

工学と情報学との協働について  
第2代情報学部長 徳山博子



徳山博子 二代情報学部長(2000-2004)

インターネットの普及に代表されるように、本格的な情報通信ネットワーク社会が到来しようとしています。たとえば電子メールは、ビジネス分野はもちろん私たちの日常生活分野でのコミュニケーションのあり方を大きく変えようとしています。また電子商取引(Electronic Commerce)などは、会社間の取引関係や消費者への販売方法などを激変させており、産業社会の仕組みそのものさえも変わろうとしています。

静岡大学情報学部は、工学系と文科系の融合した国立大学では初めての学部です。そして、高度情報通信ネットワーク社会をリードするための研究と人材育成とを目的としております。

情報科学科は、計算機科学と知識科

学を中軸にしてメディア関係やヒューマン・インターフェース関係を強化した教育研究を行う工学系の学科です。しかし、単にコンピュータやネットワークに関する技術知識や能力だけでなく、それらを生かすための人間・組織・社会への理解を兼ね備えた人材を育成します。

情報社会学科は、高度情報化が社会や文化に及ぼす影響を解明し、社会や組織の課題解決への情報化の方策を探究する文系の学科です。このために、情報活用基礎演習などをベースに、コミュニケーション論、情報政策論、社会調査法・分析演習、情報マネジメント実習、などの教育を行います。

また、今年、発足しました大学院情報学研究科は、両学科をひとつにまとめ、高度情報化社会が直面するであ

う諸課題を、既存の学問領域の枠組みを超えた複眼的アプローチにより、より深く分析究明するとともにその解決を図ろうとするものです。

ところで、“工業化の時代が終わってこれからは情報化の時代だ!”という意見が一部にあるようです。しかし、私はその意見には同意できません。そうではなくて、“工業化の時代をより高度化し文化的にするために情報化がある”と考えております。その意味で、工学部と情報学部とが協働して、そして浜松工業会の皆様のご支援を得て、実学的、実践的な教育と研究とを進めていって、21世紀に大活躍する人材を輩出する浜松キャンパスを実現したいものだと、切に希望しております。  
(『佐鳴』101号 巻頭言より 2000.7)



情報学部オープニングパーティー



情報学部第1期 教職員

2000情報卒アル



情報学部第1期生(情報科学科)



情報学部第1期生(情報社会学科)

2000情報卒アル

### 3 | キャンパス生活の変化

#### ▶ 四年一貫教育実施による浜松キャンパスの環境の激変 ◀



情報学部生

情報学部案内

1、2年生が静岡にいた頃、浜松キャンパスはよく言って事業所的(工場的)であった。教養部の2年間、学生生活を謳歌し、教養部から各学部への移行というハードルをクリアして「2年間遊んでしまったけれど浜松に行ったら頑張るぞ」という(暗黙の)意識をもった、全体として落ち着いた学生が多かったように思える。

人口密度も低く少々気だるさの漂う浜松キャンパスではあったが、大学の仕組みをおおよそ把握し横のつながりもできている3年生以上の学生相手なので、教職員にとって学生への対応は楽なものではなかっただろうか。基本的に説明不要で、「君たちそんなことも知らんのかね」と偉そうにしていられる時代であった。

四年一貫体制となり、事態は一変する。ざっと2倍に増えたマスパワーもさることながら、フレッシュ感を溢れさせながら「そんなことは自分で考えろ！」と思わず言ってしまうような質問を繰り返す1年生(ときに2年生)が少なからずおり、教養部時代の教員の苦労が偲ばれる状況となった。一方で、低学年から専門科目を教えることが増え、研究室への出入りも容易になったので、早い段階で専門に目覚める学生も増えてきたように思う。

浜松キャンパスの学生人口が増えての第一の急務は教室の確保であった。既存の建物で使えそうなところを教室にして急場をしのいだが、その後、総合研

## 浜松キャンパスの女子学生数の推移

浜松キャンパスの女子学生数は2022年4月現在、工学部は2342人中274人(11.7%)、情報学部は1078人中260人(24.1%)で、両学部を合わせて、3420人中534人(15.6%)となっている。静岡キャンパスの女子学生比率が41.9%(2117/5053人)であるのに比べるとだいぶ少ない。学科別にも差がみられ、工学部の各学科における女子学生比率は、多い順に化学バイオ工学科32.2%、数理システム工学科9.1%、電子物質科学科7.6%、電気電子工学科6.6%、機械工学科5.5%となっており、学科の差が大きい。情報学部においても、多い順に、情報社会学科43.2%、行動情報科学科25.7%、情報科学科10.9%と差がみられる。

なお大学院生に占める女子学生比率は、工学専攻は9.2%(65/710人)、情報学専攻は19.8%(32/162人)であり、両専攻を合わせて11.1%(97/872人)と1割ほどである。

なお、過去の工学部の女子学生数は記録に残っているものを辿ると、1980年の工学部在籍者数1835人中16人(0.9%)、1985年度の入学者455人中14人(3.1%)、1992年度の入学者501人中23人(4.6%)、2002年度の入学生562人中42人(7.5%)となっている(「静大だより」による)。また情報学部の女子学生数は、第1回卒業生(1999年度)では179人中47人(26.3%)であるが、47人のうち43人は情報社会学科の卒業生であり、情報科学科の卒業生では、88人中4人(4.5%)に過ぎない。また2002年度の入学生204人中女子学生は65人(31.9%)であるが、うち51人が情報社会学科で、情報科学科の入学者に占める女子学生数は103人中14人(13.6%)である。この間の推移を追うと、少しずつではあるが、浜松キャンパスの女子学生も増加していることがわかる。

究棟と共通講義棟の完成により教室不足はかなり改善された。未だ改善途上なのは、昼休みになると気の毒なくらいの行列となる食堂だろう。旧情報工学科の計算機室をつぶして生協北会館ができてから少しはましになったものの、キャンパス全体の昼食を賄うにはこの倍くらいの座席数が必要だろう。

そうは言っても、浜松キャンパスは以前とは比べようもなくキャンパスらしくなった。四年一貫教育とほぼ同時期に研究室が中心のテクノフェスタ in 浜松が、やや遅れて学生サークルが中心の大学祭が始まり、1万人規模の来客を誇る一大イベントとしてキャンパスの見せ場になっている。

## ▶ テクノフェスタ・静大祭

浜松キャンパスでは、11月の第二週の土日にテクノフェスタ in 浜松と静大祭が開催される。テクノフェスタは大学の公式な行事であり、一般市民を対象とし、工学と情報学に関する技術・学術の最先端情報に触れる多数の展示、研究室公開、体験型実験イベントなどが行われる。

ここ数年は、新型コロナウイルス感染症の影響で通常開催はしておらず、コロナ禍前のテクノフェスタは、2019(令和元)年11月9日(土)・10日(日)の両日にわたって開催された第24回テクノフェスタである。晴天に恵まれ、両日合わせて約1.4万人の人出があった(2018年度は約1.3万人)。工学部や情報学部の研究室では、科学技術の面白さや楽しさを体験する「キッズ・サイエンス」や「おもしろ実験」、最新の研究テーマに触れることができる「研究室公開展示」などが行われ、訪れた市民や子どもたちが、大学教育や研究の成果に触れる機会となった。

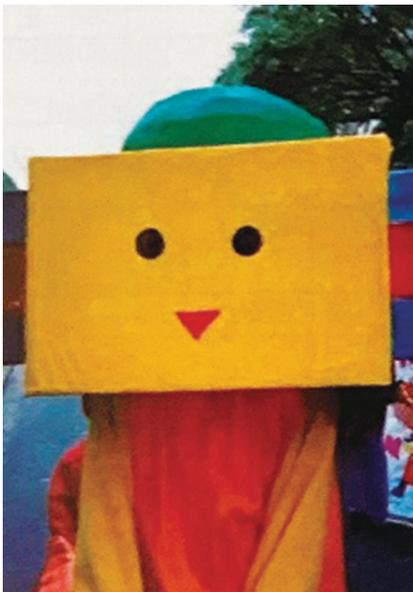
2000(平成12)年には、四年一貫教育に合わせて、「静大祭 in 浜松」が開催されるようになり、学生サークルや部活動、また研究室主催の企画や模擬店、音楽ライブイベントやストリートパフォーマンスなどがなされる、テクノフェスタと相まって浜松キャンパスの一大イベントとなる。2000年の第1回静大祭 in 浜松には、前年のテクノフェスタの来場者数の約2.4倍の1.2万人が訪れている。静大祭は学生たちの自主的なイベントであり、静大祭実行委員会が組織化され、運営にあたっている。

またテクノフェスタ、静大祭に合わせて、各学部では、ホームカミングデーや保護者懇談会、公開市民講座、秋季オープンキャンパスなどを開催し、保護者や同窓生も多く足を運ぶイベントとなっている。



第20期浜松静大祭実行委員会 2019年

はまかぜ35(2019.12)



第3回静大祭マスコット「ココちゃん」



静大祭マスコット「しいはちゃん」



第23回テクノフェスタ 2018年



第4回静大祭ポスター 2003年



第21回テクノフェスタ  
第17回静大祭 ポスター 2016年



第22回テクノフェスタ パンフレット  
2017年

## Column

開放的空間としての浜松キャンパス  
静岡大学名誉教授 森野聡子  
教養部の頃、工学部の英語の授業を担当したことがある。講義棟には女性用トイレがなく、建付けの悪い窓付近には鳩の糞…。浜松キャンパスの印象はあまり良くなかった。だがまもなく教養部が廃止され情報2号館へ研究室が移転、教員生活の基盤が浜松に変わった。

丘陵地にある静岡キャンパスは、高低差のある広い敷地内で部局ごとのゾーニングがはっきりしている。こうした空間構成は学部の自立性を高めるもの

の、中心を欠くともいえる。一方、現在の浜松キャンパスは正門から噴水まで一本のヴィスタが通り、右側には研究施設、左側には附属図書館分館・学生支援棟「S-Port」、そして噴水から右に情報学部棟、左に工学部棟が立ち並ぶ。生協もキャンパスの北と南に置かれ、左右対称とはいかないまでも整然とした配置になっている。こうした空間特性のせいだろうか、「浜キャン」は自由で開放的という印象が強い。情報棟を含め新設された講義棟には広々としたラウンジが多いのも特徴的だ。

開放的といえば、2012年に当時の情

報学研究科の学生が、カフェというメディア空間のもつ公共的議論の場としての可能性を研究するため、図書館分館前のオープンテラスで「図書館カフェ」を営業するという実験を行ったことがある。教員も休憩時間に野外でコーヒーを愉しみつつ同僚と情報交換や議論をするのに利用していた。図書館カフェは半年で終了したが、未来志向の共生社会を目指す教育・研究の場として、いつまでもオープンカフェが似合うキャンパスであってほしい。